顕教と密教
―Advayavajraとその弟子たちを中心として―

智山伝法院嘱託研究員　松　本　恒　爾

はじめに

釈尊の入滅以来編纂され続けてきた梵行の実践、教理の体系化、出家主義などを内容とするスートラ（sūtra）を中心として展開した大乗仏教を顕教とし、性的ヨーガの実践、儀礼の体系化、在家主義などを内容とするタントラ（tantra）を中心として展開した大乗仏教を密教とするならば、歴史的に既存の勢力である顕教が、自身とまったく異質な密教を批判したであろうことは容易に推測されるのである。では、密教はどのように顕教による批判を回避し、どのようにその地位を確立しようとしたのであろうか。

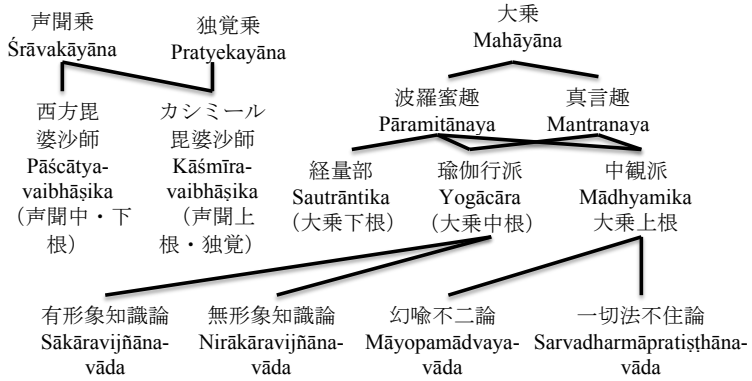
本稿では、そのことについて、十世紀末から十一世紀までに活動したと考えられるAdvayavajra[1]とその弟子たち（Vajrapāṇi、Sahajavajra、Divākaracandra）において見ていきたい。

１．Advayavajraの場合

まず、Advayavajra（Maitreyanātha、Avadhūti-pa etc.）が、どのように顕教による批判を回避し、どのように密教の地位を確立しようとしているかということから明らかにしていきたい。彼は顕密に通じたVikramaśīla寺院でも著名な学僧であったらしく、その生存年代はca.974-1065もしくはca.986-1077と推定されている。[2]ここではその著作として、仏教綱要書*Tattvaratnāvalī*（以下*TRĀ*）をとりあげる。以下

は*TRĀ*にもとづく乗（yāna）と学派（sthiti）と論（vāda）の関係性を図示したものである。

・*TRĀ*にもとづく乗，趣，学派，論の関係



顕教と密教の関係において、この図でまず注目しなければならないのは、大乗の下位区分として、「波羅蜜趣」（＝顕教）と「真言趣」（＝密教）という二つの「趣」を設定していることである。このことによって、密教は顕教と同じ大乗であると主張しているのである。そして、この主張を証明する役割を果たしているのが、二つの趣に「瑜伽行派」と「中観派」という二つの学派を共有させていることである。このようならば、顕教と密教との教理内容が同じということになり、密教に対する顕教による批判を回避することができるだろう。

しかし、密教の地位を確立するためには、教理が顕教と同じであることを主張するだけでは不十分である。では、Advayavajraは、どのように密教の地位を確立しようとしているのであろうか。このことについて、*TRĀ*では詳しく語られていないが、次のようなTripiṭakamāla（十世紀頃？）作**Nayatrayapradīpa*（以下**NTP*）が引用されている。

「同一の目的であっても、愚かでなく、多くの方便をもち、難行でなく、鋭い機根者の権利であるから、真言の論書は優れている。」

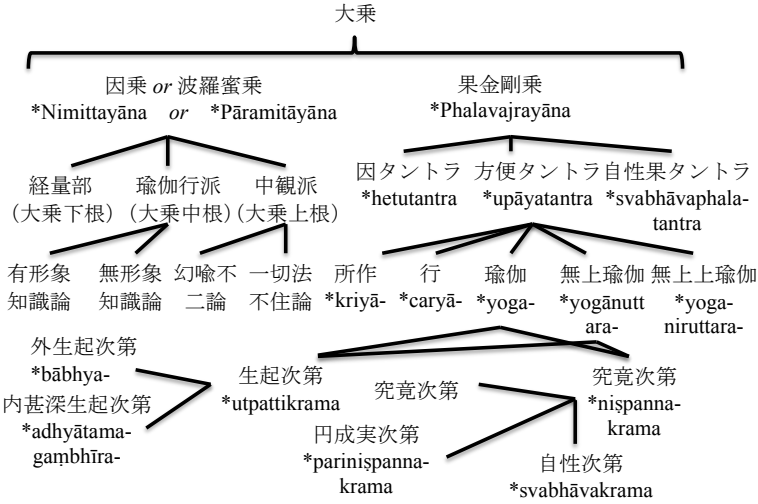
ekārthatve 'py asaṃmohād bahūpāyād aduṣkārāt /
tīkṣṇendriyādhikārāc ca mantraśāstraṃ viśiṣyate //

Advayavajraがこの*NTP*を引用する意図は次のようであろう。目的、つまり「中観派」と「瑜伽行派」という学派、もしくはそれらが目指すさとりが、顕教と同じであっても、密教は手段として優れているから、密教の方が優れている。このように、Advayavajraは手段としての優位性を主張することで、密教の地位を確立しようとしているのである。

２．Vajrapāṇiの場合

では次に、Advayavajraの弟子たちについて見ていきたい。まずはVajrapāṇiからである。*Deb ther sngon po*によれば、彼はAdvayavajraの四大弟子（Che ba bzhi）の一人であるとされ、師やその他の弟子などの著作などのチベット語訳にも多く関与している。ここではその著作として仏教綱要書**Guruparamparākramopadeśa*（以下**GPKU*）をとりあげる。以下は**GPKU*もとづく乗と学派と論の関係性を図示したものである。

*GPKU にもとづく乗，学派，論の関係
＊声聞乗・独覚乗については *TRĀ* と同じであるので省略してある．



この図からは、顕教を表す語が「因乗」もしくは「波羅蜜乗」であり、密教を表す語が「果金剛乗」であることが理解されるだろう。つまり、*TRĀ* のような趣を設定していないのである。

また、次のように、*TRĀ* では「真言の論書」（mantraśāstra）となっていた*NTP の語が*GPKU では「真言乗」（*mantrayāna）となっている。もし、このことが Vajrapāṇi 自身の改変であるとするならば、*TRĀ* の趣という区分を踏襲せず、あえて乗という区分を使う特別な意図があるのかもしれない。(3)

「そしてさらに果金剛乗が述べられるべきである。それもすなわち―
『同一の目的であっても、愚かでなく、多くの方便をもち、難行でなく、鋭い機根者の権利であるから、真言乗は優れている』
―と述べられているから、目的、つまり真実に区別はなくても波羅蜜乗は愚かであり、聖典と論理によって決定し理解する。金剛乗は愚か

でなく、聖典と論理と師の教誡によって感受するのである。さらに、［金剛乗は］難行ではなく、大楽を道とするのである。波羅蜜乗は捨であり感受がない。［波羅蜜乗は］因を道とするから因乗である。金剛乗は果を道とするので果乗として優れている。」

・D169b5-170a1, P190b6-191a1.
de nas gzhan yang 'bras bu rdo rjes'i theg pa brjod par bya te/ de yang 'di skad du/
don gcig na yang ma rmongs dang // thabs mang dka' ba med pa dang //
dbang po rnon po'i dbang byas pas// sngags kyi theg pa khyad par 'phags//
zhes gsungs pas don de kho na nyid la dbye ba med kyang pha rol tu phyin pa'i theg pa ni rmongs pa ste/ lung dang rigs pas（P *reads* rig pa.）gtan la phab ste rtogs pa'o// rdo rje theg pa ni ma rmongs pa ste/ lung dang rigs pa dang（D *adds* /.）bla ma'i man ngag gis nyams su myong ba'o// gzhan yang dka' ba med pa ste/ bde ba chen po lam du byed pa'o// pha rol tu phyin pa'i theg pa ni btang snyams pa dang nyams su myong ba med pa'o// rgyu lam du byed pas na rgyu'i theg pa'o// 'bras bu lam du byad pas na 'bras bu'i theg pa khyad du 'phags so//.

ただし、乗と名づけているとしても、図と以下の記述から理解されるとおり、密教は大乗の下位区分としての乗に他ならない。

「大乗にも二つあって因乗と果金剛乗である。」

・D164b7, P185a1-2.
theg pa chen po la yang gnyis te/ rgyu mtshan nyid kyi theg dang /

'bras bu tso rje'i theg pa'o//.

さて、*TRĀ*では密教と顕教に「瑜伽行派」と「中観派」という二つの学派を共有させることによって、密教が顕教と同じ大乗であると主張していた。一方**GPKU*では、図からも理解されるとおり、このことについての言及はない。しかし、**NTP*を引用していることからすれば、Vajrapāṇiは師の説を基本的に踏襲しており、さらに次のような記述からするならば、経量部をも顕教と密教が共有する学派としていた可能性が考えられる。

「[経量部の] 修習は二つである。数習（*abhyāsa）の場合と現観の場合である。その場合、数習の場合とは［次のようである］。最初に根を対象という家から退かせ、思惟で満たさない。その場合の思惟で満たさないとは［次のようである。］白の体色をした金剛薩埵の心臓に［太陽を観想し］、太陽に［金剛を観想し］、金剛の中心にHŪṂを観想するのである。次に金剛薩埵の心臓を太陽の中に収束し、太陽も金剛に［収束し］、金剛をHŪṂに［収束する］。HŪṂも六如来の自性である。」

・D166b1-3, P186b7-187a1.
bsgom pa gnyis te/ goms par bya ba'i dus dang / mngon du bya ba'i dus so// de la gmos par bya ba'i dus ni dngo por dbang po yul gyi grong las bzlog（D bzog）pa la bsam gyis mi khyab pa'o// de la bsam gyis mi khyab pa ni rdo rje sems dpa' sku mdog dkar po'i thugs ka ru nyi mar rdo rje'i lte bar hūṃ bsam mo// de nas rdo rje sems dpa'i thugs kar nyi ma la bsdu'o// nyi ma yang rdo rje la'o// rdo rje hūṃ la'o// hūṃ yang de bzhin gshegs pa drug gi rang bzhin//

以上のように、Vajrapāṇiは弟子においては、師の説との微妙な差異が見られる。

３．Sahajavajraの場合

次に、Sahajavajra（Naṭegana）について見ていきたい。ここでとりあげるのは、彼の仏教綱要書である*Sthitisamāsa*（以下*SThS*）である。この*SThS*は偈によって説かれ、低次の教説を批判しつつ高次の教説を解説していくという点で、その構成は*TRĀ*より*Nāgārjuna*に帰せられる*Bodhicittavivaraṇa*に近いといえる。*SThS*では顕教と密教にどのような学派を共有させていたかは明確ではない。しかし、以下のように*TRĀ*と同じ**NTP*を引用し、真言趣という語を使っているので、やはり密教を顕教と同じ大乗であると主張していると考えられる。

「同一の目的であっても、愚かでなく、多くの方便をもち、難行でなく、鋭い機根者の権利であるから、真言の論書は優れている。」
「［五蘊が］刹那滅である、あるいは知識を性質としている、あるいは空であるという確信より、五蘊が［五］如来である、あるいは金剛薩埵であるというより勝れた確信がある。」
「構想を離れた目的への到達は考察の力によって導かれる。［目的が］認知を欠いているならば、真言趣を欠いてどのように［目的への到達が獲得されようか］。」
「あらゆる形象の比類なさ、無漏の大楽、尊格の自我との一致、［これらが］どうして空性の感受からあるだろうか。」
「羯磨印と法印をそれぞれに成就し、相互の欲望を欠くならば、どうして三昧耶［印］から果があろうか。」
「［真言趣が］非常に多くの方便をもつこととは、優れた感受を［非常に多くもつこと］である。［そのことが］羯磨［印］、法［印］、大印の区別とは別にどうしてあろうあろうか。」
「鋭い機根であることによって真如の感受があり、またあらゆる欲の

享受から、大楽のさとりがある。」
「初めての数習の時に、その方便を行じることから無限の喜びがあるだろう。他の場合に難行でないことかあろうか。」
「『修習の力によって、私はあらゆる波羅蜜を完成する』［というのと］、『［私は］楽のさとりを成就する』というのでは、どちらに鋭い機根があろうか。」

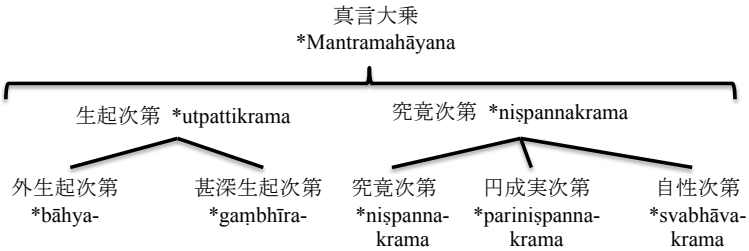
MS fol.11b2-12a5.（以下のテキストは筆者による暫定的校訂である。）
ekārthatve 'py asaṃmohād bahūpāyād aduṣkarād /
tīkṣṇendriyādhikārāc ca mantraśāstraṃ viśiṣyate //
kṣaṇikā jñānarūpā vā śūnyā veti hi niścayāt /
skandās tathāgatā vajrasattvo veti suniścayaḥ //
vicārabalanirṇītā nirāropārthasaṃgatiḥ /
parāmarśaṃ vinaiva syāt katham mantranayam vinā //
sarvākāraniraupamyam nirāsravamahāsukham /
devatāhaṃkāraprauḍhaṃ śūnyatānubhavāt katham //
karmamudrāṃ samāsādhya dharmamudrāṃ prabedhataḥ /
parasparanirākāṅkṣaṃ samayāc ca phalaṃ katham //
upāyasyātibāhulyaṃ viśiṣṭānubhavasya vā /
karmadharmamahāmudrābhedena katham anyathā //
atitīkṣnendriyatvena tathatānubhavād api /
mahāsukhābhisaṃbodhiḥ sarvakāmopabhogataḥ //
tatraiva nirbharaprītyā tasyaivopāyabhāvataḥ /
prathamābhyāsakāle syād anyathā 'duṣkaraṃ katham /
bhāvanābalataḥ pūryā sarvā pāramitā mayā /
sādhyā sukhābhisaṃbodhir iti tīkṣṇendriyaṃ kva ca //

4．Divākaracandraの場合

最後に、Divākaracandra（Deva［-ākāra］candra、

Śunyatāsamādhi、Samādhivajra etc.）について見ていきたい。ここでとりあげる著作は*Prajñājñānaprakāśa*（以下*PJP*）である。以下は*PJP*にもとづく密教の区分を図示したものである。

PJP にもとづく密教の区分



*PJP*はこれまで見てきたような仏教綱要書ではなく、羯磨（*karma）、法（*dharma）、大（*mahā）、三昧耶（*samaya）の四印の解説を中心とした純粋な密教についての著作である。それ故、図からも理解されるとおり、顕教に関する部分はほぼ皆無であり、顕教と密教にどのような学派を共有させていたかは明確ではない。

しかし、*TRĀ*と同じ*NTP*が引用されていることや、密教が「真言大乗」と表現されていることからするならば、少なくとも密教を顕教と同じ大乗であると主張していることは間違いない。

ところで、*PJP*には*NTP*に対する批判を想定した記述があり興味深い。長くなるが、以下にそれを提示しよう。

「そしてまた、波羅蜜乗の者（*pāramitāyānika）たちの教義は次のようである。無数劫の間に成仏する。［一方、］真言趣（*mantranaya or -nīti）によって今生の間に仏にもしくは金剛薩埵になると理解する者たちは、七支をともなう成就を主張する。［―中略―］

［波羅蜜乗の者たちは次のように言う。］およそ「今生の間に仏にあ

るいは大持金剛になる」ということ、それも子供の言葉のように映るのである。このような慢心から「私は金剛薩埵である」というこの説を自分自身に考える者たちが、どうして嘲笑されないことがあろうか。例えば極めて愚かな者たちが「私こそが王である」というように、［真言乗の者たちが］ただの王でない者としてだけではなく、空想癖（？）とも言われないことがあるだろうか。それ故に、波羅蜜乗より真言乗が優れたものとは見なされないのである。

次のようにこの発言もそうではない。

『同一の目的であっても、愚かでなく、多くの方便をもち、難行でなく、鋭い機根者の権利であるから、真言の論書は優れている。』—と言われていおり、さらに—『一切諸法の清浄が真如であると主張される』—と真言乗で言われているからである。

［しかし、波羅蜜乗の者たちは次のように言う。］両者により成就されるべき真如として同一の目的であることは確かである。［しかし、］（1）『愚かではない』という証因も波羅蜜乗でも同じであるから、どうして［真言乗に］何の優れたことがあるだろうか。この場合、［「愚かさ」というのは］愚かな人の過失であるのか、それともこの［波羅蜜］乗の過失であるのか。その場合、まず自性を非存在とする特徴をもつ乗には愚かさがあることはない。両者で結果的に同じだからである。人に関する理解の愚かさであるというならば、このように同じであっても、真言乗でも人の愚かさが現れるのである。

（2）『方便が多い』のであるが、［波羅蜜乗でも］認識対象をもたないの三輪［清浄］という布施波羅蜜などの方便や、遍計所執と依他起と円成実、すなわち三つの特徴を修習することによっても真如を見るだろうからである。［四無量心の］喜などの方便が優れていることがあるから、貪欲を行じることだけで［真言乗が優れている］というのは不合理である。般若波羅蜜の方便に巧みであることにより包摂された菩薩大士たちは、速やかに無上正等覚をさとるだろうと言われているからである。

（３）『難行でない』のであるが、［それも］両者で同じである。つまり、青や黄色などのあらゆるのものごとを本質からして清浄であると理解するから、それらについて難行であるということがどうしてあろうか。
（４）『鋭い機根の者の権利である』のも同じである。何故なら、一切法が縁から生じることは本質からして不生不滅であるからである。［そのことは］鋭い機根の者によってこそ理解されるのであり、劣った者たちによってではないからである。さらに、［このように］個々の性質から考察するならば、波羅蜜の論書こそが了義であるから、より勝っており、未了義こそが他のものである。」

・D83a2-84a4, P88b6-90a2.
de nas yang pha rol tu phyin pa'i theg pa pa rnams kyi grub mtha' ni 'di yin te/ gang dag bskal pa grangs med pas rdzogs pa'i sangs rgyas su 'gyur ro// sngags kyi tshul gyis ni tshe 'di la sangs rgyas sam rdo rje sems dpar 'gyur ro zhes rtogs pa rnams yan lag bdun dang ldan pa'i bsgrub byar 'dod de/

… ［abbr.］…

gang yang “tshe 'di nyid kyis sangs rgyas nyid dam rdo rje 'chang nyid du 'gyur ro” zhes gsungs pa gang yin pa de yang bus pa'i tshig bzhin du snang bar 'gyur te/ 'di ltar bsnyems pas “kho bo ni rdo rje sems dpa'o” zhes smras pa 'di rang nyid kyis rang la sems dang ldan pa rnams ci ste smod par byed/ dper na shin tu blun po（P reads shing thun）dag “kho bo ni rgyal po'o” zhes smra ba bzhin/ rgyal po ma yin gcig pur ma zad kyi rlung can du yang smras pa ma yin nam/ de phyir pha rol tu phyin pa'i theg pa las sngags la khyad par ma mthong ngo / 'di skad du brjod pa de yang ma yin te/
don gcig na yang ma rmongs dang // thabs mong dka' ba med pa dang //

dbang po rnon po'i dbang byas pas// sngags kyi bstan bcod khyad par 'phags//
zhes（P shes）gsungs pa de yang /
chos tnams thams cad nyid kyi ni// dag pa de bzhin nyid du 'dod//
ces sngags kyi theg pa las gsungs pa'i phyir//
gnyis kas de bzhin sgrub par byed pas **don gcig pa**（P pas）ni bden pa kho na ste/ (1)**ma rmongs pa'i** gtan tshigs pha rol tu phyin pa la yang mtshungs pa'i phyir khyad par ci yod// 'dir rmongs pa'i skyes bu'i skyon yin nam/ 'on te theg pa 'di'i skyon yin/ de la re zhig rang bzhin med par byed pa'i mtshan nyid can gyi（D gyis）theg pa la ni rmongs pa yod pa ma yin te/ gnyis ka la thal bar mthsungs pa'i phyir ro// skyes bu don la mos pa'i rmongs pa yin no zhes na/ de ltar 'dra mod kyi sngags kyi theg pa la yang skyes bu'i rmongs pa sngan ba yin no//
(2)**thabs mang ba nyid** kyang 'khor gsum mi dmigs pa'i sbyin pa'i pha rol tu phyin pa la sogs pa'i thabs dang / kun brtags dang / gzhan dbang dang / yongs su grub ba ste/ mtshan nyid gsum bsgom pas kyang de bzhin nyid mthong bar 'gyur ba'i phyir ro// dga' ba la sogs pa'i thabs khyad par kho na yod pas na chags pa la 'jugs pa tsam gyis ni rigs pa ma yin te/ shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i thabs mkhas pas zin pa'i byang chub sems dpa' sem dpa' chen po rnams myur du bla na med yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu mngon par rdzogs par 'tshang rgya bar 'gyur ro zhes gsungs pa'i phyir ro//
(3)**dka' ba med pa** yang gnyig la mtshungs te / 'di ltar yang gang dag sngon po dang ser po la sogs pa'i dngos po thams cad ngo bo nyid kyis rnam par dag pa rtogs pa'i phyir// de dag la dka'（P dga'）ba zhes bya ba ci zhig yod/
(4)**dbang po rnon pos dbang byas pa** yang mtshangs pa nyid do（P

de）// gang gi phyir chos thams cad rkyen las skyes ba ni ngo bo nyid kyis ma skyes shing mi 'gag pa'i phyir ro// dbang po rnon po nyid kyis（P dag gi）mos pa byed kyi dman pa dag gis ni ma yin no// gzhan yang rang rang gi ngo bo nyid las rnam par dpyad na pha rol tu phyin pa'i **bstan bcos** kho na nges pa'i don yin pa'i phyir lhag par 'gyur ba ste/ drang ba'i don gzhan dag yin no//.

この記述は明らかに顕教による批判を想定したものである。そして、手段としての密教の優位性を主張することが、さらなる顕教による批判を招いたことが理解されるだろう。

5．まとめにかえて―今後の研究課題―

以上見てきたように、Advayavajraとその弟子たちは、微妙な差異はあれ、一貫して密教を顕教と同じ大乘であるということによって顕教による批判を回避し、手段としての優位性を主張することによって密教の地位を確立しようとしているのである。

今後の研究課題としては、本稿で手をつけられなかった残りの四大弟子の一人であるRāmapālaについて検討しなければならないだろう。また、彼らがこぞって引用する*NTPそれ自体の研究を進めなければならないと考えている。

註

（1）Isaacson & Sferra［2014］においては、直弟子とされるRāmapālaの記述などから、AdvayavajraではなくMaitreyanāthaという呼称が支持されている。（Cf. Harunaga& Sferra［2014］p.59 fn.1）それ故、Maitreyanāthaという呼称を用いるべきかもしれないが、本稿では一般によく知られていると考えられるAdvayavajraをあえて用いる。

　また、弟子たちの名称についてもIsaacson & Sferra［2014］を参照していただきたい。

（2）Advayavajraの年代についてはHatano［1958］を参照。

（3）現存する*NTP*のチベット語訳テキストでは「真言の論書」（sngags kyi bstan bcos）とされており、「波羅蜜大乗」（*Pāramitāmahāyana、Pha rol tu phyin pa'i theg pa chen po）と「真言大乗」（*mantramahāyāna、gsang sNgags kyi theg pa chen po）という区分が設定されている。

参考文献

［一次文献］

・**Guruprampārākramopadeśa*（**GPKU*）of Vajrapāṇi. Toh3716, Ota4559.

・**Prajñājñānaprakāśa*（**PJP*）of Divākaracandra. Toh2226, Ota3070.

・*Tattvaratnāvalī*（*TRĀ*）of Advayavajra. *See* 宇井［1963］*and* Mimaki［1986］.

・*Nayatrayapradīpa*（**NTP*）of Tripiṭakamāla. Toh3707 , Ota4530.

・*Sthitisamāsa or Sthitisamuccaya*（*SthS*）of Sahajavajra. *SanskritMnusctipt* = The *Nepal-German Manuscript Preservation Project*（*NGMPP*）B 24/4. *Tibetantranslation* = Toh2227, Ota3071, *And see* 岩田［1998］,［2000］,［2010］,［2013］b,［2014］.

［二次文献］

・Bendall, Cecil
1905 : SUBHĀṢITA-SAṂGRAHA, Le Muséon Nouvelle série IV-V.

・Cabezón, Ignacio José
1992: A Dose of Emptiness, State University of New York Press.

・Hatano Hakuyu（羽田野　伯猷）
“A Historical Study in the Problems Concerning the Diffusion of Tāntric Buddhism in India”,『チベット・インド学集成』第三巻、インド編 I、法蔵館、pp.166-181所収。

・Isaacson Harunaga and Sferra Francesco（ed.）
2014 : The *Sekanirdeśa* of Maitreyanātha（Advayavajra）with the *Sekanirdeśapañjikā* of Rāmapāla, MANUSCRIPTA BUDDHICA 2, Napoli.

・岩田　孝
1998：「『定説集成』（Sthitisamuccaya）和訳研究―無形相知識瑜伽行派の定説(1)―」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』41-1, pp.3-14.
2000：「『定説集成』（Sthitisamuccaya）和訳研究―無形相知識瑜伽行派の定説(2)―」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』45-1, pp.13-26.
2010：「『定説集成』（Sthitisamāsa）和訳研究―無形相知識瑜伽行派の定説(3)―」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』56, pp.5-17.

2013a：「『真実十偈釈』（tattvadaśakaṭīkā）和訳研究（ad Tattvadaśaka5d-6)、『伊藤瑞叡博士古希記念論文集』pp.767-781.
2013b：「『定説集成』（Sthitisamāsa）和訳研究―無形相知識瑜伽行派の定説(4)―」、『東洋の思想と宗教』30, pp.1-33.
2014：「『定説集成』（Sthitisamāsa）和訳研究―無形相知識瑜伽行派の定説(5)―」、『東洋の思想と宗教』31, pp.22-51.

・磯田　熙文
1978：「pāramitā-yāna と mantra-yāna」、東北大学文学部研究年報29 pp.105（142）- 135（112）.

・松田　和信
1995：「サハジャヴァジュラの仏教綱要書（Sthitisamuccaya）」、印度学仏教学研究42-2, pp.205-210.

・Mimaki Katsumi（御牧　克己）
1986："The Tattvaratnāvalī of Advayavajra（Tibetan Text）",『経量部（Sautrāntika）研究』所収.

・Roerich, George N.
1949 : The Blue Annals, Part I&II（Bound in One）, Culcutta,（repr. Motilal Banalasidass 1976）.

・宇井　伯壽
「ADVAYAVAJRA TATTVARATNĀVALĪ」、『大乗仏典の研究』pp.1-52所収。

〈キーワード〉Pāramitānaya　Pāramitāyāna　Mantranaya　Mantrayāna
Advayavajra　Vajrapāṇi　Sahajavajra　Divākaracandra